

2024年度北海道大学情報基盤センター萌芽型共同研究成果報告書

1. 研究類型 B) 研究集会開催支援型

2. 研究課題名 言語教育における AI 活用の展望と教師の果たす役割に関する研究

3. 研究期間 2024年 5月 23日 ~ 2025年 3月 31日

4. 研究代表者

氏名	所属機関・部局名	職名	備考
堀 晋也	北海道大学メディア・コミュニケーション研究院	助教	

5. 研究分担者

氏名	所属機関・部局名	職名	備考
田邊 鉄	北海道大学情報基盤センター	准教授	
杉江 聡子	北海学園大学人文学部	准教授	
大木 充	京都大学人間・環境学研究科	名誉教授	

6. 共同研究の成果

本研究の目的は、①現在の言語教育における「学生の AI 使用の現状」を明らかにすること、②「AI を使ってできること／できないこと」について考察することの2点であった。そして、2024年8月26日・27日に開催した研究集会「言語教育における AI 活用の展望と教師の果たす役割—AI にできること、できないこと—」では、英語、フランス語、中国語の言語教育の研究者に加え、工学および哲学を専門とする研究者を招聘し、講演およびワークショップを実施した。これにより、幅広い知見の共有と活発な意見交換を行う機会を得た。

最初の目的に関しては、小田登志子氏（東京経済大学）による、生成 AI を活用した英語ライティング活動の実践報告、および研究代表者の堀による、北大生の AI 使用の実態と AI 使用に対する意識に関する調査報告が行われた。次に2番目の目的に関しては、まず「AI を使ってできること」という観点から、以下の講演が行われた。

- ・水本篤氏（関西大学）：英語教育における生成 AI 研究の現状と倫理的活用のあり方
- ・杉山滉平氏（立命館大学大学院）：自身が開発した英語学習ツールの紹介および開発者の視点からの外国語教育の手法
- ・分担者の大木：前年の講演で紹介した教科書のコンセプトを CLIL（内容言語統合型学習）と関連付け、AI 活用による CLIL の最適化

また、分担者の田邊および杉江は、AI を活用し「言語+αのマルチモダリティ」を意識させることを目的としたワークショップを実施した。

一方、「AI を使ってできないこと」という観点からは、田中彰吾氏（東海大学）が、身体性の視点から大規模言語モデルの言語生成メカニズムと人間の発話方法の違いについて講演を行った。

本研究集会には2日間で全国 54 大学から外国語教員を中心に大学生や企業関係者らを含め約 130 名の参加者が集まり、その模様は2024年9月4日付の北海道新聞「夢さぼトピック」にも報道された。

研究代表者の研究成果

- ・堀晋也（2025）「言語教育における AI 活用の展望と教師の果たす役割—AI にできること、できないこと—」, 『複言語・多言語教育研究』, 12, pp.205-214.